平成２０年度　第３回　市史を読む会
「明治期三田の特産物―三田米と三田青磁―」について

平成２０年１２月１３日（土）、まちづくり協働センターにおいて太成学院大学准教授の李東彦さんを講師にむかえて第３回市史を読む会が開かれました。

今回は『三田市史』第６巻近代資料Ⅱに掲載された「三田米」と三田青磁に関する史料についての講義です。

まず三田米についてですが、今回取り上げたのは同書の史料 271 号と 273 号です。このうち 271 号は明治 32 年(1899)に「神戸又新日報」に掲載された記事です。その要旨は、近年郡役所が「大分米」という品種の普及につとめた結果、徐々に有馬郡内に普及している。しかし「大分米」は見た目は良いが飯米としては食味が劣るため、これをも「三田米」と称して販売することにより「三田米」全体の評判が落ちることを危惧するというものです。

この史料からは、明治期の「三田米」をめぐっては、飯米としての需要の拡大と、従来から需要のあった酒造米としての品質との兼ね合い。生産・販売の安定・拡大をめぐる行政、農家、商人など様々な立場の人々の思惑。さらには広域的な視野でおこなわれる品種改良・普及と、地域の「特産物」としての独自性の維持。といった課題があったことがわかります。そしてそれらの課題の間には微妙な矛盾がはらまれており、そのはざまに当時の「三田米」がおかれていたことを知ることができました。

次に三田青磁に関して史料２８９号を読みました。この史料は戸田円明という神戸高等商業学校（現在の神戸大学）の学生が、明治４０年に学校に提出した大部なレポートです。史料中に「郷里ノ産業ヲ世間ニ知ラシメン」とあることから、氏は三田近辺の出身と考えられます。したがってこの史料は、地元の研究者による同時代の報告として大変貴重なものです。

戸田氏は明治４０年当時の三田の窯業を衰退の傾向にあると位置づけたうえで、衰退の原因を探究しています。その一つは、製品が時代の要請に逆行しているというものです。氏によると陶磁器生産が美術品から日用品へと移る中で、三田青磁も日用品の生産に目を向けるべきだと指摘します。この史料を通じて、明治終わり頃の商業的窯業の展開のなかで、三田青磁のあり方が転機を迎えていた様子をうかがうことができました。

三田米と三田青磁については、うどや竹細工などその他の特産物に関する史料とともに市史第６巻近代史料Ⅱに関連する史料が他にも掲載されています。地域の物産はどのような経緯で導入と生産の拡大がはかられ、またどのような課題に直面し、人々はどのように対処しようとしてきたのか。「温故知新」などと申しますが、三田の地域ブランドの確立をはかる上で現在私達が抱える課題についてのヒントがそこには隠されています。是非一度手にとってご覧ください。

次回は平成２１年１月１０日（土）、奥村弘さんに明治２年三田藩一揆に関する史料についてご解説いただきます。奮ってご参加ください。

（生涯学習課市史編さん担当）